

「有機農業実態調査委託事業」事業報告書

2024年 2月 29日

健一自然農園 代表 伊川健一

下記に有機農業実態調査委託事業の事業報告をいたします。

天理市オーガニックビレッジ宣言の中で、福住村プロジェクトの事業者等と連携しながら、耕作放棄茶畑を活用したオーガニックのお茶の生産、加工に取り組む。これらの取り組みを実施するにあたり、高原地区における有機農業の現状に関する調査並びに広報の補助の調査を行う。高原地域における有機農業（お茶）の現場の実態調査は下記の通りである。

①有機農業者数について

まずは全国の茶生産農家の推移を見てみたい。平成27年から令和2年の5年間の推移。平成27年は19603件、令和2年は12929件で5年間で6674件減少しており、1年間に1334件減少していることになる。これを奈良県に当てはめてみると、平成29年は388件、令和4年は168件と5年間で220件が減少しており、1年間で44件の減少率ということになる。続いて、奈良県の

有機栽培(自然栽培等も含む)の生産農家の数について約 20 件の農家が確認できた。今回把握しきれていない農家も含めると全体で約 25 件は奈良県には有機栽培の茶生産農家があると予測されます。こちらのパーセンテージを見てみると、全体のおよそ 15%ということになります。全国の全体の生産農家に占める有機栽培茶産農家の割合はおよそ 7.5%と言われております。したがって奈良県の有機栽培茶生産農家は全国の 2 倍の 15%ということになります。それぞれの地域の割合ですが、山添村、旧都祁村、旧月ヶ瀬村、奈良市田原地区、奈良市柳生地区、宇陀市室地区にそれぞれ点在して、有機栽培茶生産の家が活動していることが把握できました。

②有機栽培茶生産面積について

令和 5 年全国の茶生産面積は 36,000ha でした。全体のおよそ 7.5%が、有機栽培圃場としたときに、およそ 2700 ヘクタールが日本の有機栽培茶圃場ということになります。奈良県の令和 4 年の全体の茶生産面積は 488 ヘクタールその約 15%にあたる約 75 ヘクタールが奈良県の有機栽培茶面積にあると推察されます。これも全体的に見ると、日本の茶産地の平均の 2 倍の有機栽培茶圃場割合を達成していることがわかります。1 ヘクタール以上の生産面積がある有機栽培茶生産農家がおよそ 10 件、1 ヘクタール未満の茶生産農家がおよ

そ 10 件前後と言う形で、大規模にしている農家と、小規模の農家がおおよそ半
分ずつといった割合ということがわかりました。

年度	奈良県茶面積 (ha)
s40	967
s45	1200
s50	1400
s60	1530
h2	1450
h7	1190
h12	945
h17	800
h22	745
h27	726
r2	654
r4	488

年度別奈良県茶生産面積推移

エリア	茶生産面積 (ha)	%
奈良県全体	1200	100
奈良市	325	27
天理市	85	7
月ヶ瀬	141	12
都祁	179	15
山添村	275	23
室生	48	4
大淀	30	3
東吉野	25	2
その他	92	8

昭和 45 年の頃の地域別奈良県茶生産面積

③有機栽培、茶生産量について

令和 3 年時点での日本の有機栽培者の生産量はおおよそ 4800t とされています。

そのうちの約 3%が奈良県産の有機栽培茶が占めると言われており、これを計
算すると、奈良県内の 1 年間に生産される有機栽培茶は、おおよそ 140 トン前後
と予測されます。 全国の 1 ヘクタールあたりの茶生産量は 2.14 トンとなっ
ており、これと照らし合わせて考えてみると、1 ヘクタールあたり、有機栽培、

茶の場合は1.8トンの収穫があると見込まれます。これは一般栽培のおよそ85%の収穫量ということになり、有機栽培と言う付加価値を考慮して考えると十分に慣行は栽培に引けを取らない経営ができるのではないかと推察されます。

④活用できる候補圃場の割り出し

1年間の耕作放棄されている茶園の状況を調べました。日本全体では現在1年間に約900ヘクタールが耕作されなくなっている現状があります。奈良県にフォーカスしてみますと最も茶生産面積が多かったのが1985年(昭和60年)の1530ヘクタールでした。それから減少に転じて約40年間で1040ヘクタールもの茶園が耕作されなくなっていると考えられます。近年は特に耕作放棄されていくスピードが速く令和2年から令和4年の2年間においては166ヘクタール、1年間に83ヘクタールもの面積が耕作されなくなっているというデータが出ています。福住が当時85ヘクタールという生産量を誇ったのは、ちょうど55年前の1970年頃になります。奈良県の他の産地よりも、標高が高いためにお茶の出荷が遅いことや、何度も霜に当たりながら芽吹いてくるために、お茶の味わいや香りは高いが、見た目でも劣ることなども原因となったと思われます。それと国のパイロットファーム事業の波には乗らな

かったために、小さな圃場が多くより効率的な茶業を営む近代化に進まなかったことも原因だとされます。奈良県の他の産地よりもかなり早い段階で、茶園の耕作放棄が広がっていったと予測されます。そしておよそ20年前の2005年あたりの段階で10ヘクタールを切っていたのではないかと予測されます。福住内の耕作放棄茶園を検証した時、およそ20年位の放棄されている。茶園は5ヘクタールから10ヘクタールの間で存在しており、もともと85ヘクタールあった茶園の半分以上は植林されて針葉樹林になっていたり、様々な木が生えて、原野となり茶の木がほぼ追いやられてしまった圃場もあると予測されます。大和高原全体を視野に入れる時、この20年間で耕作放棄されてきた面積は800ヘクタールあるとされ、そのうち、針葉樹林等(スギやヒノキ)の苗が植えられて山林になったものや、太陽光パネルが施工された土地も近年は増加いたしました。そして、そのまま茶の木が大きくなり熟成茶園として足元の土が豊かになり資源化している耕作放棄茶園は少なめに見積もったとしても300~400ヘクタール大和高原には存在すると推察されます。

シュミレーション

仮にこれらすべての耕作放棄茶園を活用して三年晩茶の生産を行った場合、仮に350ヘクタールとして、4年に1回ずつ収穫したとして、1年間に87ヘク

タールを収穫。1ヘクタールあたり10トンの生産が見込めるので、里山三年晩茶の生産量は850トンになります。これは現在の大和茶総生産量を約半分に当たります。また現時点では、全国的に緑茶に特化して生産してきた日本茶業界において、飽和した緑茶の生産販売価格が減少してきているので、逆に三年晩茶の生産額の方がキロ単価あたりは上回ってくると考えられます。そういった意味で経済効果はさらに大きいものが見込めると思われます。

結論

奈良県は全国の生産地の中でもより早く耕作放棄が始まった地域だといえます。それは冷涼で香り高くおいしいお茶ができるのですが、収穫時期が遅くなってしまうことで、単価が下がってしまうことが大きく影響し、どうしても経営的に難しい状況に追いやられたことが挙げられます。それと緑茶の生産地があまりにも多く、特に隣の京都の宇治茶については早くからブランディングに取り組んできたこともあり、大和茶として直接販売することがなかなか叶わなかったことも単価を上げることができなかった大きな要因だといえます。そうした中で奈良県の耕作放棄地が増えていたわけですが、その中でも福住地域はさらにそれよりも数十年前に耕作放棄されていました。その結果農薬や化学肥料を散布すると、言うことがかなりの年月の中で行われていないことが

幸いし、途中の微生物も増え、有機物をどんどん分解して豊かな腐食層のある
土壌を取り戻したといえます。そういった耕作放棄茶園を熟成自然茶園とし
て見方を変えることで、三年晩茶の生産を行う。基盤として使える事は非常に
メリットと考えます。また全国で流通している煎茶や抹茶や玉露とは全く一
線をかくした言う商品であるために、バッチィングせず、逆にカフェインなど
を気にする女性を中心としたお客様や、眠りにくかったり冷え性や低体温で困
っている方々に喜んでいただけるお茶として新たな市場を作っていけると言う
可能性がります。福住地域はもちろんですが、大和茶地域全体に三年晩茶
を作ることができる可能性のある耕作放棄茶園が数多く存在していることが確
認できましたので、これからの有機栽培茶の広がりとともに、奈良県の大和茶
をオーガニックティーの一大産地にしていけると素晴らしいと考えます。